

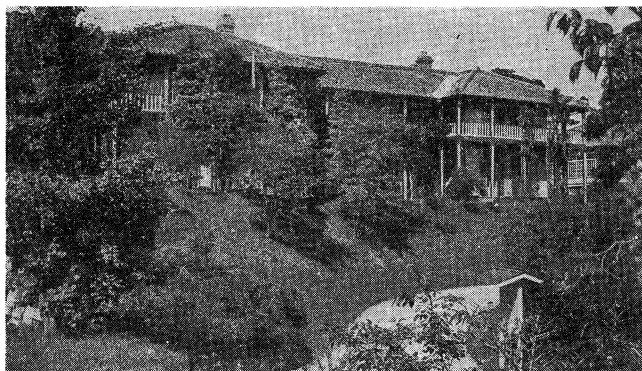
求心力と遠心力

―序にかえて―

院長 岡 本 道 雄

神戸女学院の百十年の歴史の中で、この歴史を支える力として、私には、求心力と遠心力という二つの力が、時代によって力点の置き方を変えながら、交互に作用していたように思えるのである。ここでいう求心力とは、神戸女学院の教育の基盤、創立の原点であるキリストの福音に立ちかえり、それを深化させようとする力であり、また遠心力とは、この基盤の上に立ちながら、時代の徴^{しるし}を見きわめ、教育の場、高等教育の場としての神戸女学院の飛躍・発展をもたらした力である。

神戸女学院における最初の求心力は、言うまでもなく、西日本においてはじめての女子のキリスト教の学校として、わが国の若い女性に福音の種をまくための教育機関を創った、創立者タルカット、ダッドレー両先生の伝道への意欲、伝道への行動力であったであろう。そしてその後の神戸女学院の歴史において、―そこでは勿論、求心力、遠心力のどちらか一方の力だけがはたらいたということはなく、どちらかに力点が置かれたものではあったが、―二つの力を分けて考えてみるならば、第二代・クラークソン校長、第三代・ブラウン校長の時代、つまり、神戸女学院にリベラルアーツの理念が導入され、女子高等教育発足への努力がなされた時代は、遠心力の強くはたらいた時代と言えるであ



タルカッタ先生時代の最初の校舎、(南舎)

ろ。そしてさらに、ソール院長時代の求心力、デフォレスト院長時代の遠心力、またはじめての日本人院長、畠中 博先生時代の求心力、難波紋吉院長時代の遠心力と、大きくその軌跡をたどることができるように思う。

一九八六年は、エライザ・タルカッタ先生の生誕一五〇年にあたり、それを記念して、この『学院史料』を先生の特集号とすることになったが、この時に際して思うことは、神戸女学院の長い歴史の中で、求心力、遠心力のいずれが欠けても、今日の姿の神戸女学院はなかったであろうということである。この二つの力がバランスよくはたらいたところに今日までの神戸女学院の発展があるのだが、この発展の基いをつくったのも、実は、タルカッタ先生であったと私には思えるのである。

タルカッタ、ダッドレー両先生の伝道者魂が神戸女学院の建学の精神であり、これが神戸女学院の教育の根幹をなしていることは、言うまでもなく周知のことであるが、その本質において、「学校教育」よりも、「伝道」に使命感を持つ両先生は、やがて学校をクラークソン女史の発病帰米後は、再びタルカッタ先生が岡山より神戸女学院に戻り校長代行となり、明治十五年に第一回卒業生一二名を送り出し、その後校長職を新任のブラウン女史にゆずるのである。そしてその後のタルカッタ先生は、岡山、京都、広島の地で伝道を続け、晩年には神戸の女子神学校(ダッドレー女史によって神戸

女学院に隣接して創立された学校。現聖和大学の（一源流）の教師また伝道者として働かれる。しかも同時にたえず、神戸女学院の教師、生徒、また卒業生と密接な関係を保ち続けられ、また当時、神戸女学院関係者はタルカット先生の誕生日（五月二十二日）を記念して毎年お祝いの会を開き、そしてこの日が今日まで神戸女学院の創立者記念日（十月十二日の創立記念日とは別）として伝えられていることも、タルカット先生と神戸女学院の長年の深い関係、また先生が終生、神戸女学院のことに心をくばり、強い愛情を持たれていたことを物語るものであらう。

強烈な伝道者魂を持ち、神戸女学院の建学の精神の確立に大きな貢献をなし、しかも、自らは一步身を引いて、後輩たちの、遠心力をはたらかせた活動を温かく見守り続けた、タルカット先生、—この先生のような存在を神戸女学院がその創立者として持ちえたことに、またこのような方を神戸女学院におつかわし下さった神の御恩寵に、私は心より感謝せざるを得ないのである。そして神戸女学院がタルカット精神を現代に生かし、ますます神のみ業を証する学校であり続けることを、強く望むものである。